

相手を知ることが大切

山形県立左沢高等学校 三年 遠藤 香春

高校生活での貴重な体験の一つは、三年生の農業の授業の「草花」という科目で楢岡特別支援学校大江校との交流会をしたことです。交流会では支援学校の生徒と花植えをし、互いの学校の紹介を行いました。

私達が初めて交流会を行うことを知ったのは、当日の二週間前でした。その時私達は、支援学校の生徒にどのように花の植え方を教えればよいのか悩んでいました。なぜなら、支援学校について知っていることが少なく、どのような人たちがいるのか、どのように接する必要があるのか分からなかったからです。私は、小学校や中学校の頃に身近にいた人たちのことを思い出しました。それは、特別支援学級の生徒です。小学生の頃は、昼休みに友達と特別支援学級に遊びに行くこともありましたが、どのようなことを意識して話していたのか覚えていませんでした。強いて言うならば、何も考えていなかったのだらうと思います。具体的な対策は思いつかないまま、当日を迎えることになりました。支援学校は私達の左沢高校からバスで五分ほどのとても近いところにあります。バスの中でも、私は身体的に障害があったらどう手伝うのが良いのか、花の植え方はどうやったら分かりやすいのか、うまく会話をできるだらうかという不安が少しありました。実際に支援学校に着くと、そこは左沢高校のように自然に囲まれた穏やかな所で、左沢高校よりももっと静かで落ち着きのある雰囲気です。私達は早速、支援学校の生徒達とお互いの学校紹介をしました。支援学校では、授業の中で様々なものを手作りしていることを紹介してくれました。例えば、ペン立てや食器です。実際に作ったものも見せてくれて、その器用さにとっても感心しました。次はついに花植えを行いました。花植えは、支援学校の高校一年生から三年生の生徒が分かれ、三つの班に分かれた私達がそれぞれ合同で作業を行っていきます。私の班では、私達と同学年の三年生との作業です。まず、始めに自己紹介を行いました。支援学校の三年生から好きな食べ物や、好きなこと、好きなアイドルグループを添えて自己紹介をしてくれました。私達が同じように自己紹介を終えると、次は花植え作業です。私と一緒に作業を行ったの

は支援学校の男子生徒でした。彼がどのような障害を持っているかは分からなかったけれど、会話が苦手で恥ずかしがり屋な人だと感じました。実は、私も彼と同じように初対面の人とのコミュニケーションが苦手です。しばらくは、花の植え方の説明だけで私達の会話はありませんでした。花を植えるための穴を花壇の土に掘っている時に、一匹のミミズが細い体をゆっくりうねらせて出てきました。先程までは、支援学校の先生の助けがないとお互いに会話が出来ませんでした。ミミズによって会話の糸口が開かれました。ミミズを手に取りる彼に思い切って虫が好きか質問をしてみました。彼はうなずいてくれました。そこから少しずつ会話をしていきました。長く会話が出来たわけではないけれど、少しずつ言葉をかわすことができ、楽しく感じました。私は支援学校について、また障害者について知っていることがありませんでした。全く別の世界なのではないかとも想像していました。しかし花植えを通して、消極的な性格という彼と共通点があること、虫が好きだが蛙は嫌いだという私との相違点があることが分かり、彼について知ることが出来ました。それと同時に、自分の繋がりを感じ、相手を理解することが出来たことが何よりも嬉しかったです。

今まで生きてきた中で、今回の花植え交流以外に障害者と関わる機会は何度かあったはずですが。しかしながら、障害や障害者について知っていることや活用出来る知識は思いつくほどありません。なぜなら、私は障害や障害者自身について理解していなかったからです。例えば、身体的、知的、精神的に障害を持つことを知っていても、大変だろうと思うだけで関心を持って接していなかったからです。実際の苦労は、相手の立場にならなければ簡単に理解できるものではありません。私達が想定しているようなネガティブな考えや感情を持ち、苦労を感じている人ばかりとは限らないのではないのでしょうか。私達が、障害を持つ人々と接するときにはいちばん重要なのは相手を知ることです。それは、人と人が言葉や行動など様々なことを通して本意を分かち合うことなのだと思われました。今回の福岡特別支援学校大江校の生徒との交流では、自分との共通点を通じて相手に寄り添うことが出来ました。今後は、障害者だけでなく、自分とは異なるすべての人に思いやりを持って接することができるよう、他人を理解することを続けていきたいです。